

# 幾山河

## 第九號

平成8年5月15日

発行

社団法人 沼津牧水会

### 目次

若山牧水生誕百十周年	2
牧水片々(その5)	4
平成の歌合せ	6
特別寄稿「からすうり」	8
第42回 沼津牧水祭	
碑前祭・芝酒盛	10
短歌大会	11
第8回 雛の歌会	12
文化講座	13
サロン音楽の夕べ	14
平成7年度事業報告	15
定款・後記	16

# 若山牧水生誕百十周年

## ——東郷町牧水祭——

### 「旅と酒と自然を愛した歌人をしのぶ」

昨年、若山牧水の生誕百十年を記念し、牧水の命日に当たる九月十七日、宮崎県東郷町で牧水祭が開催されました。宮崎県内をはじめ九州各地のほか、青森県五所川原市、秋田市、東京都、岡山県哲西町など牧水ゆかりの

地からの参加も得て、盛大にとり行われました。沼津市からも五月女教育長、沼津牧水会の林理事長、青木朝子理事、柴田事務局長、磯崎剛会員が前日から参加しました。

十六日の前夜祭では、「牧水のうた、文化の



夕べ」が開催され、第一部では、牧水、白秋、啄木の短歌の独唱と朗読に、第二部では、姉妹都市の沖縄県宜野湾市から訪れた舞踊団による華麗な踊りに、盛大な拍手が寄せられました。直会では、各地からの参加者と交歓し、大いに交流を深めることができました。

翌十七日午前、牧水生家近くの歌碑前で、記念祭が始まり、地元の古老が「ふ

るさとの尾鈴のやまのかなしさよ秋もかすみのたなびきてをり」など二首を朗詠するなか、巫女姿の坪谷中女生徒の導きで牧水長男旅人氏（当記念館館長）はじめ参加者が次々と献酒をしました。三十六名の中学生が牧水の短歌に曲をつけた「牧水の歌」を合唱し、詩情豊かな雰囲気を出しました。

坪谷川をはさみ牧水生家の対岸にある牧水公園内には、歌碑十一基が並ぶ散策路「牧水のうたの小径」が設けられ、ここから牧水生家や尾鈴山、坪谷川を一望しながらの短歌大会も催されました。

午後からは会場を役場前の文化センターに移して、若山旅人氏の記念講演が行われました。

旅人氏は、牧水の思い出を語りながら「まさか、父は、自分が亡くなった後、これほど沢山の方々が自分のために日本の各地から集

まつてくれるとは、思いもしなかったでしょうね。」と喜ばれ、木村映一町長、渡辺邦彦教育長は、「若山牧水の歌碑は全国に二百基近くもあり、毎年数基ずつ増え続けています。こ

のことからも牧水の人氣が国民的であることがわかり、生誕の地東郷町は、終焉の地沼津市などに働きかけて、全国レベルの牧水を偲ぶ場を設けたい。」と熱をこめて語られた。

市役所七階の東面する私の部屋から真正面に香貫山の全容が、そして、その裾をゆつくりと蛇行していく狩野川とが望まれます。今、四月、折しもうす紅色の山桜が香貫山に点々と咲き出し、水ぬるむ狩野の畔は緑が萌え始めております。

昨秋、牧水生誕百周年を記念して催さ

## 山桜 尾鈴の山と香貫山

沼津市教育長 五月女 武

眼前に  
ある桜の  
香貫山と

れた牧水祭に東郷町からお招きを頂き、初めて坪谷の生家をお訪ねする機会を得ました。ふるさとの尾鈴の山のかなしさよ

秋もかすみのたなびきてをり

と詠われた季節よりは少し早い頃でした。障子の開け放たれた二階のお座敷に長いこと座し、視野いっぱい広がる尾鈴の山なみと、お宅の真ん前で淵をつくりゆつくり

と曲流する坪谷川とを飽かず眺めて、網膜に焼き付けてまいりました。そしてこの風景こそが、幾山河に分け入る旅の出発点であったとの感慨を深めてきたのでした。とりわけ尾鈴の山なみに灯るぼんぼりのような山桜の群れと、全山を打つ雨の風情とをこよなく好まれたとのお話も伺いました。

自分なりに納得しているところです。

(平成八年四月五日記)

## 若山牧水賞創設

牧水顕彰と短歌文学の興隆をめざす

牧水の生誕百周年を記念し、宮崎県、同県教育委員会、延岡市、東郷町、宮崎日日新聞社の共催により、歌集及び牧水に関する評論で傑出した功績を挙げた者に贈られる「若山牧水賞(副賞百万円)」が創設されました。全国を視野に入れた宮崎県が発信する画期的な文化事業として、歌壇をはじめ各方面からの期待を集めています。

生誕百周年を機に、牧水の偉大な業績を顕彰する事業を創ろうとの気運が、宮崎県内の関係者を中心に盛り上がり、若山牧水賞創設の運びとなったものですが、これは、牧水が日本の短歌の歴史にすばらしい足跡を残し、同県内に止まらず全国各地に熱心なファンを多く持つことと無縁ではありません。

なお、選考委員には、大岡信、岡野弘彦、馬場あき子、伊藤一彦の各氏が予定され、注目されます。

若山牧水賞の創設が、牧水の業績の再認識とわが国短歌文学の興隆に寄与することを期待してやみません。

# 牧水片々 (その五)

## 牧水との旅の記憶

若山旅人

### 宮島の一夜

父の袂たもとにすが紐ひもる様にして心はずませ沼津を発つてからもう五日程経った。連夜の大人同志の宴席に連らなり乍らも、翌朝



床を離れるともう一人前に帰れたような気になり、疲れもせずにはしや燥いあせで来られたのも、生来丈夫な子だったのと牧水の小学三年坊主の扱い方が

巧者だったことにも依ると思う。

前号で書いた様に、山陽本線下りの急行列車食堂車でのワンカットがあった後、この父は名所安芸の宮島で下車した。もう夕方近かった。牧水には若い頃の思い出でもあったのだろうか平清盛の創建した厳島神社の結構を、息子に見せてやる楽しみがあったらしく、道みち色いろと話をしてくれた訳だった。駅のホームから直ちかに乗込んだ小さな連絡船が島についた頃は、もう陽もかげつて薄暮となっていた。それにしてもこの明るさはどうだろう、改札口を出ると私はその駅前通りのキラキラした照明の華やかさに圧倒される思いだった。今と違って当時の宮島には日本三景の一つとしての誇りと気概とで生きている個性のかがやきがあった。

私達父子は、駅前通りを少し行った右側のかめふく亀福という宿に入った。珍しい名前なので七十年経った今でも忘れない。すぐに部屋に通されたが窓の手摺からもう海で、対岸の海峡を挟んだ町並みに夕日が当たっているのが望まれる。この一週間程の何処でも同じだったが、一見不思議な組合せの二人旅なのが宿の者には見当がつかなかったらしい。セルのインバネスを羽織った羽織袴の鬚の小男と、久留米緋のよそゆきに下駄履きの坊やの二人連れの旅行者にはまず扱いに途惑うもの

があつたらしい。それでも聽てしばらくすると私は宿の女中達のいいおもちやになつた。何処でもそうだった。

やがて通された風呂は、厳島神社に倣つたらしい朱塗りの御殿造り、観光客脅しの大浴場である。此処で期せずして私は所謂「大人の世界」を覗かされる事になつた。

広い浴槽なので私は泳いでみたりした。父は向うの方に少し離れ浴槽の縁に枕をして仰向けに身体を浮かせ目を瞑っている。私もその真似をしている。一人の客が入つて来た。品のいい社長タイプの立派な人だ。この浴室は当時としても斬新な設計で湯槽の縁は浴場の床と同じ高さに嵌め込んであるので殆んど私の目の処で床のタイルが拵がつてゆく。その人は壁の蛇口から湯を出して肩からながし始めた。ふと見るとしゃがんだ脚を展いて隠し処を洗っている。見るともなくそうしているとその人は皮を剥いで中身を抜き出して洗っているのだ。私は驚いた。そう云う構造になつてゐる事も知らなかつたからだ。私はそつと静かに湯槽の底を足で蹴つて父の寝ている傍まで湯を掻き分けてゆき、「あの小父さんへんな処を洗っている……」と告げた。

牧水は目を明けた。そして私の低声の告げ口を目に確かめた途端「馬鹿！ 可怪なこと訊くんじやない、何故そんな

とこ見る！」と声をひそめて私を叱りつけた。そして折角いい気持そうに眠っていたのに、妙に氣不味くなつて湯からあがり始め、私も仕方なく身体を拭きはじめる次第となつた。

今になつて思うのだが、牧水はおそらくそのとき当惑していたに違いない。十歳の長男に「男のかなしい機微」を問われて三十八、九歳の若い父親が即答出来るわけではないからだ。そう云う時私だったらどうか恐らく、世に云う若い父親の哀れな途惑いではなかつたらうか。家を出てから初めての二人だけの静かな泊りだった。大きな膳を前にして殆んど甜める程の静かな酒で食事を終えた。「お前も大人になつたら色んな事を目にするが、一々驚くな。黙つて胸に入れろ。みつともないから……」。出口の襖に近い方の寢床の父はそう呟くと聽て軒をかき始めた。

(沼津市若山牧水記念館館長)



## 平安の雅を現代に

# 古式床しく「平成の歌合せ」

青木朝子

沼津市などで組織するジャパン・アート・フェスティバル・イン沼津'95実行委員会に沼津牧水会が特別協力の形で参加した、ぬまづ夢舞台'95の初日として、九月三十日午後六時半から沼津御用邸記念公園で「平成の歌合せ」は開幕しました。歌人牧水の終焉の地沼津で、古式床しい和歌の遊戯を再現してみようといわれたものです。

判者を「うた」主宰で毎日歌壇選者の玉城徹氏、講師を県歌人協会会長で「水甕」代表の高嶋健一氏、同じく県歌人協会副会長の上田治史氏にお願いし、読師（司会）を沼津牧水会理事の須永秀生氏が担当されました。以下秋の夜の夢舞台の模様を記してみます。

芝生の上に椅子を並べたにわか造りのギャラリ―はすでに満席。かがり火が焚かれ寒冷紗でおおわれた幻想的な竹の舞台に雅楽が流れるなかを、平安時代を模した衣装をまとった右方人（詠み人）左方人の各十名がしずし

ずと登場、左右に分かれて席に着く。つづいて読師、講師、判者の順に登場し人麿影供を背に中央に着席。司会進行須永秀生氏。

先ず小者が左右の第一番題「海」の方人から受けとった短冊を読師へ渡す。読師は左方作品より朗々と読み上げる。（このときOHPにより観客は作品を目で見ることが出来る。）読み上げた作品を講師へ。左方講師（高嶋健一氏）がゆったりとことばを選び説得力もって擁護論を展開すれば、これを受けて右方講師（上田治史氏）は雄弁をして熱っぽく応戦する。左右の方人は言うに及ばず、観客もどちらに軍配が上がるかと固唾を呑んで待つ。

左右の講師の間にじつくりと耳を傾けていた判者（玉城徹氏）はおもむろに、しかも簡潔に独特の言いまわしで断を下す。その瞬間、溜息にも似たざわめきが所々から起こる。

そして第二番、第三番へと繰り返されてゆくほどに佳境に入り、いつか演者、観客とも

に平安の雅の世界に迷い込んで行くのでした。打打発止とわたり合う左右の講師の論を紙面の都合で割愛するのは残念ですが、判者の勝負の断とその依るところを掲げましょう。

### 第一番 題「海」

左 青錆びて波うちかへす昏れがたの潮の  
にほひやはははいまさぬ 岡本 淳子

右 茜よりひかりにはかに移ろへばむらさ  
きだちて海面昏れたり 青木 朝子

判者 心すがた共によろし。但し共に初句  
に難あるか。よりにて持（互角）とする。

### 第二番 題「山」

左 廃坑の御霊鎮まる雄別の月照る山の木  
の葉木菟哭く 浅井不二雄

右 低山の香貫の峯に雲動き雨はあがりぬ  
秋のま昼を 鈴木 計一

判者 左こころ在りて聞こえるが廃坑の御  
霊少しことごとし。右歌すがたよろしく難な  
し。依って右勝ち。

### 第三番 題「松」

左 老松は張り枝の隙のよろしきよ鳩ひと  
つるて朝の間を啼く 坂部 マリ

右 海風は松の林を越えゆけり松ぼつくり  
を少しゆらして 川口 和子

判者 それぞれ姿よろしくも左歌よろしき  
よ、右歌少しに理あり、依って持とする。

第四番 題『風』

左 たふされし マキ スギ センダン  
マテバシヒほうほうとう風のゆくへ  
や 前田 鉄江

右 風にそひ風にしたがふ野牡丹のしのお  
る恋の深きむらさき 鈴木 利子

判者 共に心よろしきも左歌木の名四つ並  
べしところ難あり。よりて右勝ちとする。

第五番 題『歌』

左 わが歌を心にとめていとむと便りを  
くれし東京の人 小野 徳司

右 この青き水平線の彼方より浜風に乗  
り 汝が歌聞こゆ 渡辺 和彦

判者 左歌心深く姿よろし。唯いとむは  
いささか難あり。右歌水平線の彼方は遠きに  
過ぐるならん。よりて左勝ちとする。

第六番 題『月』

左 曳かれ征きし馬のいなく声かとも背  
戸の笹の葉鳴らし風吹く 塩谷千鶴子

右 初夏の京の嵯峨野路さえざえと竹の皮  
ひろふ三、四枚ほど 小野美津子

判者 左歌出征馬を思いし心深くも笹の葉  
をいなく声と聞くこといささか無理あり。  
右歌さえざえと拾うはふさわしからず依つて  
左勝ちとする。

第七番 題『月』



左 初めての胎動覚ゆ月明り禱りし吾子の  
薄命にして 向笠 律子

右 抜き差しのならぬ長月ぼかーんと余白  
のような月が見てをる 杉山 郁代

判者 左胎動薄命漢語ふたつ使いしこと如  
何と思えど心深し。右歌余白は面白きもぼか  
ーんは遊びすぎならん。左勝ちとする。

第八番 題『川』

左 天の川天城嶺に落ち露しぐれ山葵にや  
さし狩野のみなもと 八代 厚

右 ゆらぎつつ水草の藍ふかみゆき川の面  
に夕闇おりる 新井 愛子

判者 山葵は面白きが天の川、天城嶺、露  
しぐれ、狩野と材料多し。右歌水草におりる  
夕やみおもむきあり。よりて右勝ちとする。

第九番 題『光』

左 ひたすらに沖を指せる雁の列消えゆ  
くものはひかり残すも 上杉 有

右 障子透くわかばのひかり移ろひて祇王  
の像の彫り跡深し 君山宇多子

判者 それぞれに心深し。左歌目指すは如  
何ならむ。右歌祇王の名用いずありたし。よ  
つて持とする。

第十番 題『恋』

左 湖の面に残る夕映え遠き日の君の眼が  
照射してくる 星谷 亜紀

右 胸の炎のおとろへゆくを愛しめりこほ  
ろぎの声透りくる夜半 近藤ゆみ子

判者 それぞれ昔の恋を言えること如何か  
作りごとにて今この恋にてありたし。よりて  
持とする。

かくして、平成の夢舞台より人々は徐々に  
覚めながら、松林を後に深い闇の中へ散つて  
行きました。  
(沼津牧水会理事)

## 特別寄稿

# 「からすうり」

稲垣 滯子



それは絡んだ蔓の一本に、今生まれたばかりに開いた清楚な五瓣の花である。反り返った花びらの先は無数に裂けて、華やかな縁飾りだ。夕闇迫る中にぼっと灯ったふたつの明かりを見つめていると、不意に数日前の新聞の文章を思い出した。

朝日新聞夕刊のコラム「素粒子」の一節。

家の庭に大きなつつじの古木があつて、春にはいつも見事な花を咲かせてくれる。去年の初夏、花のあとの剪定を怠けていたら、根元から太い蔓が勢いよく伸びて幹にからみ、

そこから枝分かれた細い蔓が四方八方にはびこつて、たちまち梢は闖入者の緑の葉に覆われてしまった。

平成七年の夏は、連続真夏日四十二日という猛暑で、心身ともに怠惰な日常が続いていた。むし暑い晩夏の夕暮れ、荒れた庭先を歩いていて、つつじの木の陰にひっそりと咲く二輪の白い花を見つけた。

暁闇にレースのような壮麗な花を広げて、あとは沈黙。だれか知る、からすうりのところ。

ああこれはカラスウリの蔓だったのだ。秋になつたら真っ赤な実がぶら下がって、それにトンボが止まつたり小鳥がついばんだり：と、空想は楽しく胸をときめかせた。

翌朝早く、私は三脚とカメラにマクロレンズをつけて近づき、息を詰めてシャッターを押した。朝露を含んだ白いレースはやや緑を帯びて一夜限りの短い命を歌っている。花の下にはもう小さい実がついていて、ふと横を

見ると、あ、あるある、他の蔓には既に大きくなった実がいくつもぶら下がっていた。今まで一度も気付かなかつたが、どうやらこれは最後の花のようだった。

単調な私の生活に、カラスウリの定点観測が始まった。何しろ地の利は上々、歩いて十歩のわが庭である。日々育つてゆく青い実はそれぞれに个性的で楽しいが、中でも花を写した双子の実には思い入れがあった。それは少し小振りでも、可憐な少女のように木陰に守られている。私は手を替え、露出を変え、レンズも換えて、朝な夕な風情を写しとった。秋になつて、「素粒子」も都会のカラスウリ





の消息を伝えてきた。

熟したカラスウリを積み重ねた本の上に  
そつと置く。夕焼けをぎつしり詰めた爆  
弾である。

えっ、もう真っ赤に熟したのかしら？ う  
ちのはまだ青々とはち切れそうなのに。それ  
に丸々としたこの形も、すこしおかしい。

ある日の写真教室でその話をすると、心優  
しい友人は笑いながら教えてくれた。

「それはスズメウリなのよ。カラスにはなれ  
ないの」「じゃあ、赤くならない？」「そうよ。



黄色くなつて、それでおしまい……」

——お前は偽物だったのね。しげしげと青  
い実を見上げながら私は呟いた。でも、自分  
が勝手に思い込んで、偽物だと極め付けるの  
は笑止千万。ここはやつぱりカラスウリとし  
て最後まで付き合おう。

各地に紅葉の便りが聞かれる頃、カラスウ  
リは蔓から黄ばみ始めた。逆光に透ける黄葉  
と、実の輪郭を彩る光の線が美しい。

カラスウリが一つ静かにぶら下がってい  
る。なぜかふと地球の自転を感じる行く  
秋の夕べ。

その年の暮れ、わがカラスウリもすっかり  
熟した。艶やかな黄金色の実が陽に映えて、  
冬ざれの庭が明るくなった。強風が吹き荒れ  
た夜でさえ一つも地に落ちることなく越年し  
た。この細い蔓のどこにそんな強い力がある  
のだろう。自然の生命力に驚いてしまう。

大雪の朝は雪帽子をかぶり、氷雨の一日は  
ひねもす濡れそぼつて、カラスウリは徐々に  
衰えていった。そしてある日とうとう、熟れ  
た実を狙うヒヨドリの標的になった。しかし  
宙に浮かぶ実を狙うためには、どこにも止ま  
り木がない。見ていると、遠くの高い枝から  
一直線に舞い降りて、鋭い嘴でまず一撃を加  
えると、つつじの梢に絡んでいる蔓を両足で

掴み、それをブランコにして今あけた穴へ嘴  
を突っ込む、という驚くべき芸当である。ま  
るでターザンだ。こんなシャッター・チャン  
スは到底間に合わないから、私は窓越しにあ  
きれながら見ているばかりである。

「素粒子」のシリーズも終わりを告げた。

ひしゃげたカラスウリの実が一つ風に揺  
れている。何かをなし遂げたものの静け  
さと尊厳。

春三月、褐色の風船がはぜてしぼんだよう  
に、中の種もすっかり落としてしまったカラ  
スウリを、蔓ごと鎌で取り払った。庭先で落  
ち葉と一緒に燃やすために。つつじの梢はも  
う花芽も膨らみ、新しい季節の到来である。  
ほんの一抱えになつてしまった蔓と実は、カ  
ラカラと乾いた首を立て、一瞬の炎になつて  
燃え尽きた。

(沼津牧水会会員)



# 第42回 沼津牧水祭

## 碑前祭・芝酒盛

十月十五日

第四十二回の沼津牧水祭碑前祭・芝酒盛が秋晴れの好天に恵まれ、盛大に行なわれた。ご病気の若山旅人氏の代理として次男の純氏夫妻、桜田光雄市長、川口末吉市議会議長、五月女武教育長の参列を得、東京牧水会の和田会長、田原事務局長、沼津牧水会の会員や中学生短歌コンクール入賞者、一般参加者など総勢七百名を超える人々が集い、賑やかな会となった。

芝生の上では、参加者が毎年好評の焼き鳥やおでんを肴に振舞われた樽酒の「牧水」を存分に楽しみ、ブルーシーさんのジュース、東海庵さんの抹茶、珈琲館さんの立て出しの珈琲が飛ぶようにはけていった。

歌碑前の芝生の舞台では、花柳稔師匠による舞踊、沼津合唱団のコーラス、岳心流沼津愛吟国風会の合吟が披露され、毎年繰り広げられる沼津松波会煙火太鼓に加え、初参加の裾野五竜太鼓保存会の若々しく豪快な響きが会場いっぱいに鳴り渡ると、会場は盛大な拍手に包まれた。

会場の一角では、酒をこよなく愛した牧水にちなんで、地酒の原酒「牧水」、牧水の故郷である宮崎県東郷町から取り寄せた焼酎の「牧水」とやはり宮崎県特産の柑橘類の平兵衛酢（へべづ）が販売されたが、年々愛好者が増えつつある。

午後三時までの昼下がりの時間が短く感じられるほど充実した碑前祭であった。



大勢の参加者に恵まれて

# 短歌大会

十月二十九日



短歌大会は二五〇首の投稿を得、「短歌人」の編集担当人小池光氏を講師に迎えて、沼津市立図書館四階の視聴覚室で行われました。

午前中一時間の小池光氏の講演は、「短歌のことば・ことばの短歌」と題して、『はじめにことばありき：短歌はことばで成立する。短歌がことばで成り立てば、読む側もことばをことばとして受け止める。ことばは物があつて成立するが、ことばが物を成り立てるとも考えられる。』と、話されました。この理論は、このところ話題になっており、例えば「私の思想は他者の言葉で成り立っている。」などの話は哲学的ですが、具体的な「山」についての話は判りやすく説得力があつて、参加者

は大きくうなずいていました。

午後は投稿作品の批評で、多くの作品に触れましたが、時間が短いため一首にかける時間が少なく、語る方も聞く方も大変なようでした。

以下、選者選の牧水賞三首と他の七首、及び互選賞の五首を紹介します。

牧水賞第一席

道に迷ひ地下道出づれば重おもとリズムを打ちて

飛行船がゆく

朝比奈ふく

牧水賞第二席

昨夜見し夢の目出度さわれ若く怒りて悪をこらさむと行く

小野 徳司

牧水賞第三席

大ゆのみに五杯も飲みし黄楊柳売りの老人は十年を来ぬ

田中 千代

御物なる白磁の壺にふるごと眠るみどり児ひざに置きたり

高橋 啓一

一年に一度と待ちし旅の夜を語る間もなく農婦の眠る

山田 旭子

亡き母の着物を解けば掛衿に妻楊子一本刺されておりぬ

石川つや子

サーカスに攫はれそこね三人の子の母となり今はばとなりぬ

前田 鉄江

掃除機の古きを啖い電機屋が暗黙のうちに買ひ替へを言ふ

郡山 敏子

広告の淫靡なる裸婦頭の上に揺るる車中は鬱がかぶさる

星屋 亜紀

密度濃き秋の真闇に風たちて窠出しの壺のつぶやきも絶ゆ

樽松 文子

互選賞（一位より五位まで）

一人より寂しき日のあるものか子と住む老にあらたな孤独

深川かね子

それぞれの家風に馴染みて行く子等を金婚の座より夫と見守る

山中さち子

核心を問はず語らず君とみて無機物のごと風に吹かるる

林 和

男らを棒立ちさせてクレインに鉄骨を吊る若き女は

土屋さち子

取りたての栗を持ち来て寡婦われに友は亭主の愚痴も置きゆく

服部 美枝



## 第八回

# 雛の歌会

平成八年三月三日(日) 午後一時三十分

沼津市若山牧水記念館 会議室

講師 今野寿美氏



今年の雛の歌会は、暖かな日和に恵まれ、和気藹々の雰囲気の中でおこなわれました。

「りとむ」の今野寿美先生の講話でしみじみとした豊かな半日が進んでゆきました。先生は神奈川県の川崎にお住まいのおしどり歌人で、

○出席不良の生徒六人追認しとてもかくても卒業は花

○なんのためとは言わざれど職辞してなほ欲ふかく生きむ思ひす

の歌でも判るように御自身も教師の経験をお持ちです。繊細な感じの小柄な美しい方で、その風貌に相応しいきめ細やかな批評は暖か

く、まず受け止めて、その上で問題点を指摘する姿勢が心地よく、心打られました。

当日の参加者は六十名、投稿歌数は七十七首で、和室に入れないのではと、心配になるほど盛会でした。

今野寿美先生の選んだ歌

○度々の災害逃れ髪落ちぬ雛よあなたも  
七十五歳 橘 初枝

雛段に並ぶ雛も幾多の災害を逃れて、私と同じように瑞々しい若さを失ってしまった。そして気がつくともう七十五歳。初節句に実家の父母が贈る風習を受けての感慨は、雛の会に相応しい歌であらう。

○とある朝君の声きく電話ボックスは花  
せんだんの天蓋の下 渡辺たつ子

とある朝の初句は唐突だが、下句へ雪崩れるように歌い上げるリズムが心地好い。君の声聞くを生かした下句が巧みである。

○手ざはりのふくらかにして漬梅のたち

まち紫蘇の色とらへたり 川村 富子  
漬梅のふくよかさと、紫蘇の色の鮮明さで生きた作品になった。

○竹むらの羅漢は著我の花の文春日をあ  
びてまどろみてゐる 飯泉 千春

羅漢が著我の花の丈だというこの発見が作品を成立させた。その発見を受けての下句

もとほけた雰囲気だして良い。

○出荷終えがらんと空きし貯蔵庫に蜜柑  
の香りほのかに残る 大川 規子

蜜柑農家の、出荷後の充足感と空虚感、そんな思いが蜜柑の香りに象徴されていて完結したよい作品。

批評の一例ですが、塩谷さんの作品

○五位鷺か時おきて鳴く声ほそし独り目  
覚めて読みつぐ夜半は

に対して「五位鷺かの『か』は強める動きがある。この五位鷺は内容的には強くないので『か』と強めないほうがよい。『声ほそし』も五位鷺の声には相応しくないのではないかと話されましたが、納得しました。

○七十からはじめし短歌が力なりと農婦  
たりし人の声は明るし 市川美津子

の率直な表現に賛意を示すなど、一首一首の評は優しく、そして厳しく、参加者はうなずきながら聞き入りました。また、幾つかの作品の破調についての話も説得力があつて参考になり、収穫の大きな会でした。帰りの列車を予定されていたために会後の懇談の時間が持てなかったのが残念でしたが、秋の牧水祭短歌会(十月十三日)には、御主人の三枝昂之氏と共に来沼してください。期待しています。(須永 秀生)

# 文化講座

## 「素晴らしい故郷 沼津を語り・歌う会」

### “第1回 千本の昔を話し、唄おう！”

日 時：平成8年2月25日(日)  
午後1時30分～午後3時30分

会 場：記念館会議室

参加者：50人

共 催：千本をよくする会



パネラー 転太郎兵衛氏      パネラー 森田竹久氏      パネラー 畠 弘氏



(第2回は、6月2日(日)午後2時開催の予定です)

## 「初心者のための短歌教室」

日 時：平成7年5月～平成8年3月  
毎月第2土曜日 午後1時30分～

会 場：記念館会議室

参加者：延べ220人



講 師：須永秀夫氏



(ご好評をいただき、今年も)  
継続して開催いたします。)

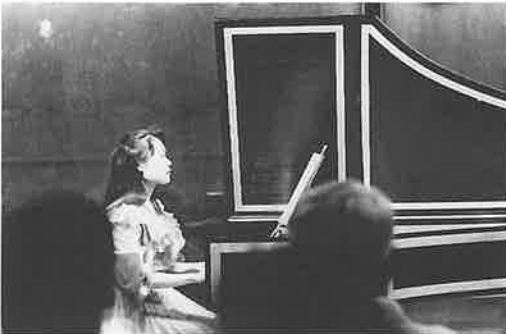
▼本田竹広 (ピアノ)+坂井紅介 (ベース)  
5月2日(火)



▼夢鳴群 in 牧水館 コーラス 夢鳴群  
7月1日(土) 筑前琵琶 大藪旭晶



▼杉山佳代チェンバロ・リサイタル  
8月19日(土) 沼津西高出身 (伊藤千里撮影)



▼京谷弘司とカルテット・タンゴ  
12月10日(日) 京谷弘司 淡路七穂子  
古橋 幸 田中伸司



(伊藤千里撮影)

# サロン音楽の夕べ

沼津市若山牧水記念館ラウンジにて

▶野坂恵子箏リサイタル  
6月24日(土)  
(伊藤千里撮影)



▲木管五重奏の夕べ  
10月8日(日)  
岩佐和弘 赤坂達三 山口卓郎  
藤田 旬 小川正毅 (伊藤千里撮影)



▲Chris. & 祥子 パーカッション・デュオ  
3月17日(日)  
新谷祥子 クリストファー・ハーディ  
(伊藤千里撮影)

# 平成7年度事業報告

総会(第9回) 平成7年5月10日(水) 午後7時～8時

理事会	第1回(通算46回)	7年4月22日(土)午後6時～7時30分	館報発行
	第2回(〃47回)	7年8月29日(火)午後6時～7時30分	第15号 7年12月30日
	第3回(〃48回)	7年10月3日(火)午後6時～8時	第16号 8年3月15日
	第4回(〃49回)	7年11月24日(金)午後6時～7時	会報発行
	第5回(〃50回)	8年1月31日(水)午後6時～7時	第8号 7年6月1日

## 調査研究事業

### 「東郷町牧水祭」への参加

期 日：平成7年9月16日(土)～17日(日)

場 所：宮崎県東郷町

参加者：五月女沼津市教育長 林理事長 青木理事 柴田事務局長 磯崎副会員

### 「東京牧水会」への参加

期 日：平成7年11月8日(土)

場 所：東京都千代田区九段南4-8-2 宮崎県東京ビル

参加者：川口理事 金子理事 柴田事務局長 鈴木弘行会員

### 「秋田市牧水歌碑除幕式」への参加

期 日：平成7年10月20日(水)～21日(木)

場 所：秋田市千秋公園 参加者：林理事長

## 第42回沼津牧水祭

### 碑前祭・芝酒盛

日 時：平成7年10月15日(日) 午前11時～午後3時

会 場：千本浜公園 牧水歌碑前 参加者：約700人

### 短歌大会

日 時：平成7年10月29日(日) 午前10時～午後4時

会 場：沼津市立図書館 視聴覚ホール

講 師：小池 光氏 応募短歌：250首 参加者：200人

## 文化行事等

### 講演「素晴らしい故郷 沼津を語り・歌う会」

日 時：平成8年2月25日(日) 午後1時30分～午後3時30分

会 場：記念館会議室 参加者：50人

### 短歌会「雛の歌会」

日 時：平成8年3月3日(日) 午後1時30分～午後4時

会 場：記念館会議室

講 師：今野寿美氏 応募短歌：77首 参加者：54人

### 初心者のための短歌会

日 時：平成7年5月～平成8年3月 毎月第2土曜日

会 場：記念館会議室

講 師：須永秀生氏 参加者：延べ220人

### 「中学生短歌コンクール」

募集期間：平成7年6月14日(水)～7月22日(土)

応募短歌：1,040首(12校 1,040人)

入選短歌：56首(56人)

表彰日：平成7年10月15日(日) 沼津牧水祭碑前祭にて

### 「歌会 ぬまづ松籟の宴」への協力 “平成の歌合せ”

日 時：平成7年9月30日(土) 午後6時～午後7時30分

会 場：沼津御用邸記念公園

音楽イベント 「サロン音楽の夕べ」 牧水記念館ラウンジ

## 社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

- 第一条 この法人は、社団法人牧水会という。
- 第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。
- 第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。
- 第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業
- 第五条 この法人の会員は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者
- 第六条 会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。
- 第七条 この法人の入会金は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- 2 この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
- (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹  
 〈副理事長〉 大河原二郎 杉山光男  
 〈理事〉 上田治史 佐藤英之助 河本與司幸  
 浅井 治 保坂輝夫 田中和男 寺田桂子  
 川口和子 青木朝子 須永秀生 金子安夫  
 〈監事〉 四方一彌 八十濱俊一

## 編集後記

枯れ蔓に祭提灯のような赤い実をぶらさげる「からすうり」。この多年生の蔓草は、十月の牧水祭の頃になると、俄然その雅味のある面白さで人目を引きまします。瓜に似た小形の実の中には、蠟螂（ろうろう）の頭にそっくりな三角形で茶褐色の種子がつまっています。古くは玉章（たまぎら）とたまずさ（結び文）と呼ばれました。

夏の夕暮、レース飾りをいっぱい付けた緑白色の五瓣の花をつけるらしいのですが、朝寝坊には、レース状の花の裂片の縮んだのしか見られませんでした。

沼津牧水会の古くからの会員である稲垣濤子さんに寄稿のお願いをして、心が洗われるような「からすうり」の一文をいただきました。彼女の持つ「瑞々しい感性」に、忘れていたものを見つけ当てたような想いがして、幸せな気分になっています。

会報「幾山河」は、会員皆様のものです。皆様のご支援によって輝きます。沼津にお住まいでない遠隔地の会員さんにも是非皆様方の彩豊かな想いを寄稿ください。

牧水記念館は来年、平成九年十一月一日に開館十周年を迎えます。お一人、お一人の心と心結び合せて、節目の年、開館十周年を飾りたいと願っております。これからも、お気付きの点がございましたら、お教えくださいますようご支援ご協力をお願い申し上げます。

（事務局長・柴田 昌明）